済州島村落共同体信仰の変化と持続

ー納邑里の酺祭の事例を中心にー

姜　京希

1. はじめに

韓国の村落共同体信仰は、儒教式の祭祀と巫式の祭儀という二重構造の原理に基づき行われると指摘されている。儒教式の祭祀は、いわゆる男性中心として執り行われる祭祀であり、巫式の祭儀は主に女性中心として行われている。こうした類型は、元来の古代時代から行われてきた固有巫俗祭儀が李朝時代の儒教思想の普及によって、儒・巫という二つの類型の祭儀への変化が生じたといわれる。

元来の固有巫俗祭儀は、女性司祭者によって行われてきた。それが男女共同主管で挙行することになり、儒教の普及が盛行するにつれ、過去の女性の位置を男性が占有するようになった。そして、儒教の影響で儒教式の祭祀が盛大に行われながら、儒教式と巫式が習合された祭儀形式が主流を成すようになったのである。しかし、現代に至って巫俗祭儀を挙行する巫女の激減により、儒・巫習合の祭儀から巫俗祭儀が徐々に消滅していき、現在はほとんど儒教式祭祀のみが残されるようになっている。

村落共同体信仰は、その土地で生活する村民がその村の共同神に対し、村と深く関わる祭場で村民のために祈願する集団祭儀である。その集団祭儀の名称は地域によって、山祭、山神祭、洞祭、洞神祭、堂山祭、距離祭、街里祭、将軍祭、城隍祭、コルメギ城隍祭、本郷祭、酺祭などさまざまに呼ばれているが（朴桂弘 1982：3 - 4)、その根源は同じである。

日本植民地時代に韓国における村落共同体信仰について調査を行った村山智順は、このような多様な名称を統括して「部落祭」と呼び、「部落祭は生活の地域と条件とを同じくする部落の人々が、その生活を脅かす災害を免かれ、その生活を増進せしむる幸福を求むるが為め神明に祈願し、之に依って何等の不安もなく寧る感謝に充てる平安な生活を楽まんとする目的から、各自その心を一にして年一回又は数回祭祀を謹修する郷土的年中行事の一つである」と述べている（村山智順 1937：１、朴桂弘 1982：4 再引用)。

本稿は、2000年11月3日から9日まで済州島納邑里で行われた現地調査から得られた聞き取りや文献資料をもとに、納邑里の酺祭を中心として、済州島における村落共同体信仰のあり方や位置づけを試みようというものである。納邑里の調査の中から、納邑里の村落共同体の生活は儒教思想を基盤として成り立っていること、そして村民がその村の出身であることにどれほど強い自負心をもっているかを、窺い知ることができた。さらに済州島の他の村よりも、村落共同体信仰の儒教式の酺祭の伝統的形式を保存と維持していることが分かった。

加地伸行（1994：4 - 5）によれば、「沈黙の宗教—儒教、それは日本、朝鮮半島、中国、すなわち東アジア地域をゆるやかに結んでいる大文化である」。儒教は東北アジアの人々の心を根底から把握して練りあげたものであるから、困難な問題が起こったとき、儒教的立場の大本に帰り、そこから問題を観察し、解決の手がかりを得て、人々を納得させることができた、と述べている。

現代社会において、このように儒教的思想に基づいて行われている村落共同体信仰が、長い歴史の流れの中で多くの変遷を見せながらも、村の人々の生活に欠くことのできない精神的要素になっていることについて考察してみたい。

まず、ここでは韓国における村落共同体信仰の歴史的変遷の過程を考察する。さらに済州島納邑里の酺祭を中心として、儒教という大文化の枠組がどのように周辺社会に影響を及ぼし、運用され定着しているのか、またこれからの展望について探ってみたい。

2. 調査地の概況

北済州郡涯月面納邑里は、済州市に繋がる中山間道路の南西部に位置し、済州島の北海岸から2.5キロメートルほど内陸部に入った標高80 - 90メートルの盆地に集落を形成している。村の起源については、文献上で明らかにされていないが、今から約680年前、高麗時代の1300年頃に人々が入村し、最初は「郭南」のちに「科納」と村名を付けた。それから350年ほど過ぎた1674年、村内に分散し生活していた村の人々が村の中心部に集まり自然村落を形成してきたが、風水により1675年には「納邑」に改名されたと伝わる。しかし、現在までも「科納」という村名が通用している。

納邑里は、儒教思想を基盤に忠・孝・礼を実践する文郷・班村であると言われてきた。村内に漢文学の書堂を設置し、後世のために教育に力を尽くし、李朝時代には大勢の人材が輩出した伝統的な儒林村であった。このような儒教的な観念は、現在まで村落共同体の生活の重要な基盤となっている。例えば、父母を尊敬し、夫を大事にしない人は人間とし

て認められない。村内に立てられている「孝烈高氏之閭」という烈女門や、伝承されている孝子・烈女の説話からも、如何に孝道思想が大事にされているのかが分かる（金行玉編1984）。

現在、納邑里は「郷会再現示範村」や「孝道示範村」になっており、儒教式で行なわれる村落共同体信仰の「酺祭」は、1986年に「済州道無形文化財第6号」に指定されている。

納邑里の産業経済は、特用作物として胡麻・麦・油菜・芋があるが、1960年代から始まったみかんが今では主な経済収入源となっている。そのほかに共同牧場運営の畜産業なども生活経済を賄っている。かつては、良質なタバコの栽培でも知られていたが、今は栽培してない。

1948年4・3事件の祭、納邑里は疎開令の対象となり、村落全体が焼き払われている。その後集落が復建され現在に至っており、村内の中央道路を境界として東と西に分けて、西上洞、西中洞、西下洞、東上洞、東中洞、東下洞など六つの洞がある。

1946年開校された納邑小学校は、1948年4・3事件の際に全焼したが、1954年に全村民の協力で再建された。また村落会館・老人会館・青年会館の建設、農業用水、道路整備、電気施設、みかん下置場、搗精工場などの開発事業が推進され、生活は近代化した。道路整備によって済州市内から納邑里までは車で30分ほどになった。

しかし、1980年代に入り、済州島社会の産業化・都市化が進むにつれ、納邑里村落から都市への人口流出が顕著になった。納邑里の公式的な統計によれば、1977年（済州大学耽羅文化研究所1990：23）には460世帯で男985名、女1017名、計2002名であったが、2000年（納邑里事務所提供）には463世帯で男713名、女696名、計1409名である。約23年の間に世帯は3世帯増えているが、逆に人口は30%の減少を見せている。

特に若年層の離農の現状は深刻な問題となっている。こうした実情は、1997年に完工した19世帯の多世帯住宅の建設事業がよく示している。この建設事業は、廃校の危機に直面した納邑小学校を残すために推進された。納邑里では、多世帯住宅を建てて、小学生のいる若年世帯に無償で提供した。これは、「小学校の存在が、まさに村の生き残りにつながる道である」という信念で村民のすべてが協力し、村落の維持や発展を求めて行った事業であった。

納邑里には、1986年「天然記念物第375号」に指定された「錦山公園」という暖帯林地帯があり、このなかに村落共同祭の酺祭を行う酺祭壇が設置されている。村内にある宗教施設は、大韓仏教曽渓宗月印寺をはじめ、1969年には大韓仏教龍華宗彌勒仏青龍寺、1975年には大韓基督教イエス長老会納邑教会と韓国日蓮正宗仏教会済州道総本部西部地域納邑班が建立された。仏教の信者は200人ほどいるが、その他の宗教の信者は少ない。

さらに村には、元来の固有巫俗信仰の祭場の「本郷堂」である「ハルマンダン（堂）」があるが、ここでは村落共同体信仰のレベルでは祭儀を行わず、個人レベルの祭儀が行われているだけである。

このように納邑里は、今日まで儒教思想の影響が強く残されているために、巫俗信仰や外来宗教に対しては厳しい現状が見られる。

3. 村落共同体信仰の歴史的変遷の過程

(1) 巫俗祭儀から巫・儒教式祭祀へ

韓国における村落共同体信仰の祭名は、一般的に「洞祭」または「堂祭」という。(李杜鉉外 1991：180)。この洞祭と堂祭は、すでに新羅、高句麗、百済以前の古代社会で発生した集団祭儀で、現在に至るまで韓国の多くの宗教現象のなかで地縁的結束や和睦を図る祭儀として、人々の生活に多様な機能を果たしている代表的な民間信仰の一形態である。

既述したようにその祭堂の名称は、京畿、忠清各道では山祭堂、山神祭堂、江原道では城隍祭、全羅、慶尚各道では堂山、済州道では本郷堂、酺祭壇など地域によって様々であるが、根本的には同じものである。「堂」は、「大庁」（家の中央にある板の間）、「小屋」、「神仏の前に立てる旗」、「祭祀の場」、「多くの人が集まる場」などの様々な意味を含んでいる（朴桂弘 1982：3)。さらに堂は村落を単位として、村民が集まり村に関する事項等を討議し、堂神を奉安する場所となっており、村の政治や経済と密接な関わりがあるとされる。

洞祭の歴史は古代部族国家の巫俗的祭天行事まで遡ることができる。扶余の「迎鼓」、濊の「舞天」、韓の「天神祭」、高句麗の「東盟」のような祭天行事は古代部族社会では祭政一致の民族祭儀としての民衆的年中行事であり、秋収感謝祭の農耕儀礼でもあった（李杜鉉外 1991：182 - 183)。

こうした儀礼は、新羅時代に至っては宮中儀礼となり国家レベルで行われてきた。高麗時代では「八関会」をはじめ、「燃灯会」など土俗神信仰と仏教思想が習合された形態の国家宗教的な大行事への変化が見られる。さらにこのような集団的民族祭儀は、各地域で村落レベルの集団祭儀を生じさせており、それが今日の各地域で伝承されている洞祭である。

ここで注目すべきは、このような祭儀には必ず踊りと歌が伴ったという事実である。舞踊は神霊と人間が交際する宗教的技術として、神を迎え、迎えた神を喜ばせ、また神を愉快にお送りするという意味が含まれている。

ところが、李朝時代の治国理念である儒教思想は、固有思想時代の巫俗的民族信仰に大

きな変化をもたらした。元来女性司祭者によって執り行われてきた集団的民族祭儀は、男女共同主管で挙行されるようになり、高麗時代には官から公認された。だが、李朝時代になって儒教が男性社会に普及され、官の儒教式祭儀の形式と神祇を導入し、男女両性の信仰構造と堂祭が分離されることになった。男性は土俗信仰の土台の上に儒教式祭祀を構築し、女性は元来の巫俗的祭儀を守り続け現在に至っているといえるのである。

要するに、韓国では部族国家単位の巫俗的農耕儀礼、氏族共同体単位の季節祭、国家儀礼などは高麗時代の八関会、燃灯会を最後に無くなっており、儒教の影響で儒教式と巫式が習合された祭儀形式が主流を成すようになった（朴桂弘 1982：580)。

しかし現代に至っては、巫俗祭儀を担う巫女の激減により、儒・巫習合の祭儀から巫俗式祭儀が徐々に消滅していき、現在の洞祭はほとんど儒教的祭祀のみが残っている状況であるといえる。

(2) 村落共同体信仰に対する弾圧と再創造

現在、村落で挙行されている共同体信仰の祭儀は、韓国における歴史的、社会的、文化的変動の中で、中央や地方の行政的、社会的権力者などの外部的、内部的な様相によって何回も厳しい弾圧を受け、中止または消滅したり再生したりしてきたことは事実である。

歴史的に考察して見ると、まず李朝時代の儒教政策は固有の巫俗祭儀を禁じ、士大夫層が城隍祭などの巫俗祭儀を行うことを杖罰で規制し、また巫女に対しては、その祭儀行為を行わないように取り締まりを強化し弾圧してきた。済州島でも儒教の影響が及び「郷校」が設置され、巫俗祭儀の民間信仰は強い弾圧を受けたのである。一つの例を挙げれば、李朝時代の肅宗の時、済州牧使李衡祥は、淫祠と佛宇 130 ヶ所を焼き払い、また巫女 400 人ほどに対して、巫俗祭儀の行為を規制し抑圧したと記録されている（李杜鉉外 1991：184)。

それ以降、いわゆる迷信打破の政策としては、日帝総督府の権力者によって、また日本植民地からの解放後は、国内における左翼系やキリスト教、新生活推進委員、セマウル運動の管理者などによって実施されてきた。こうした迷信打破の政策によって、1969 年済州島では 135 ヶ所の神堂と祭壇が破壊されたが、そのことからも全国的にどれほど多くの神堂と祭壇が破壊されたのかが推察できる。特に 1970 年代のセマウル運動によって、一層多くの神堂と祭壇が破壊されており、村落共同体の祭儀までも廃止されたのである（韓国文化広報部文化財管理局 1992：118 - 120)。

こうした中でも、長い歴史の流れとともに保存され伝承されてきた村落共同体信仰を人々は無視できず、弾圧を受けながらも社会の底辺に根を下ろし現代まで引き続き行われているのである。ただ村落共同体信仰は歴史的・社会的変化に伴い、儒教の影響で固有の

巫俗祭儀の形態に変化が見られる。いずれにしろ、韓国の近代化の生活政策は儒教式の祭祀でも廃止や弾圧の対象とし、村落共同体信仰自体を打破し根絶しようとしたといえるだろう。

韓国の経済的発展に伴って西欧文化の導入が激しくなるにつれ、現代社会における村落共同体は解体、崩壊などの深刻な危機を迎えている。それでも、1980年代後半からは伝統文化が再認識、再評価され、村落共同体信仰は新たに復活、強化されることとなり、また道、市、郡などの行政的次元からの支援が与えられ、再創造されるような状況が現れている。

4. 済州島納邑里の村落共同体信仰

上述の通り、韓国の村落共同体信仰のように済州島にも二重構造の原理に基づき、村落共同体の祭儀は行われている。済州島では、男性が中心として挙行される儒教式の村落共同体の祭祀を「酺祭」とし、その祭祀が行われる祭壇を「酺祭壇」または「酺祭ドンサン」という。酺祭は、郷校の釈奠祭のように儒教式に基づき行われる。酺祭の名称は、村によって農酺祭、里酺祭、里社祭、大祭、堂祭、洞祭、街祭など様々であるが、済州島では、酺祭という名称を普遍的用語として用いる。一方、女性が中心として挙行される巫俗祭儀は、「ダン（堂）グッ」といい、「ハルマンダン」の「本郷堂」で行われる。

ここでは、納邑里の酺祭を中心に村落共同体の信仰を考察してみたい。納邑里では巫俗儀礼を行う本郷堂があるが、村落共同体レベルの祭儀は行わず、主婦達が個人レベルで祭儀を行っているにすぎない。さらに現在は村の出身のシンバン（巫女）がおらず、また巫俗儀礼に対する村の人々の関心が薄れているので、酺祭に限りみてみたい。

納邑里の酺祭は、1986年4月10日に「済州道無形文化財第6号」に指定されており、酺祭壇は、1986年2月8日に「天然記念物第375号」に指定された暖帯林地帯の「錦山公園」の内に設置されている。祭場は、常緑樹がこんもりとした公園の真ん中に石を築き造っており、祭場の回りは自然石で城のように石垣を築きあげている。祭場の広さは、東西8メートル、南北15メートルであり、「西神壇」と「土神壇」は北向きの正面に、「酺祭壇」は東向きに置かれている。西神壇の左側には望燎位があり、土神壇と酺神壇の右側には直六面体の石が置かれている。若者が祭式を忘れないために、3人の献官の拝位の場所にはブロック大の石を用意し、その石に初・亜・終と掘って設置している。祭場の南側には祭祀の際、祭官達が物忌みする場所である祭庁の建物がある。

納邑里の酺祭は、済州島のなかでもその伝統性や原形が一番よく保存されていると言わ

れているが、文献にはいつから村で酺祭が行われていたのか、ということについての記録はない。ただ郷土史（金行玉編 1984）によれば、1684 年（肅宗 10 年）村に凶年となり、牛馬などの家畜の伝染病が広がった。そこで錦山の中央に祭壇を設け、春秋に山川神祭を行ったとされている。ところが、1702 年（肅宗 28 年）から 1706 年（肅宗 32 年）の間、済州島の地方牧使によって巫俗祭儀が迷信とされ禁じられることになり、納邑里の山川神祭は行うことができなかった。しかし、1719 年（肅宗 32 年）飢餓や疫病の発生が村に続いていたために、村民の願いが中央の朝廷の管理者に伝えられ、祭儀は復活されることになったと記録されている。

村の人々は現在、納邑里ではかつてから「酺祭」のみ行われてきたと述べているが、かつてという時間的観念が曖昧であり、むしろ時代の変遷に伴い、山川神祭が儒教の影響で儒教式の酺祭へ変わってきたのではないか、と思われる。

酺祭の祭儀対象となる神は村によって異なるが、納邑里では西神・土神・酺神の三つの神様が祀られている。「西神之位」は麻疹神であるが、かつて恐ろしい麻疹が村に流行した際、村民が病気にかからないように祈願した神で、現在では祀られていない。「土神之位」は村落守護神であり、「酺神之位」は各神として人物災害之神である。土神と酺神は、主に村の豊饒や安全や繁栄を祈り祀られている神様であり、一般にこの神は済州島の他村でも祀られている。

納邑里では、従来年 2 回の酺祭、すなわち春祭と秋祭が行なわれていた。春祭は旧暦正月の上丁日、秋祭は旧暦 7 月上丁日に行われてきたが、1970 年代から村の人々の決議によって秋祭は廃止され、毎年春祭のみ現在まで行われている。ところが、村内で上丁日に不浄なことがある際には祭儀を行わず、別の日の亥日に行なっており、いわゆるこれを「或丁或亥」という。祭儀の挙行時間は、夜の子時である。

祭儀の管理は、村の男性によってなされている。酺祭に関わる諸事項、例えば祭官の選出や祭儀の予算など、祭儀を行うことと関わるすべてのことは、村の総会である「郷会」で決められ執行される。かつて郷会は郷長によって開かれてきたが、1910 年以後郷長制がなくなってからは里長を中心に会議を行われている。郷会は祭儀の 10 日前ほどの年初に開く。祭儀の費用は村の公金や村の有志の寄付金で当てられているが、現在は一世帯当 1000 ウォンずつ出している。里長によれば、納邑里の酺祭は無形文化祭と指定されているために、10 年前から済州道庁より支援金（約 150 万ウォン）が与えられているという。

祭官の選出に関して村人の説明を借りれば、「体がビリン者」は祭官になれない。ビリンという意味は、その年に家族に亡くなった人がいたり、人間や犬など動物の死体を見たり、体に腫れ物があったりすることを指しており、そのようなことで体が汚れていることをい

う。妻が月経中の人もビリン者とされる。

祭官は初献官、亜献官、終献官など 12 人で構成されており、その役割は次の通りである。

初献官：神に最初に酒盃を献ずる役。

亜献官：神に二度目に酒盃を献ずる役。

終献官：神に三度目に酒盃を献ずる役。

執礼：笏記の奏上、祭儀の執行や司会を担当する。

大祝：祝文を奏上する。

賛者：執礼を補佐する司会役。

謁者：執礼の笏記の通り祭官を案内する役。

奉香：焼香する役。

奉炉：香炉を捧げる役。

司樽：酒盃に酒を注ぐ役。

奉酌：酒盃を受けて献官に渡す役。

奠酌：献官から酒盃を受けて祭卓に置く役。

それ以外に、典司官がいるが、その役割は供物の準備などの管理を担当する。

祭官としては学識や徳望のある年輩者の中から献官に選ばれていたが、最近は里長が初献官の役割を果たしている。執礼は祭儀の手順に上手な人、また大祝は祝文（注 1）を告げることに上手な人が選ばれている。納邑里では、献官、執礼、大祝、賛者、謁者の祭官は 50～60 代の年輩者達が担当しており、それ以外の祭官は 30～40 代の若年者が担当し、年輩者と若者が共に参加し村の様々なことについて話し合っている。

さらに祭官に選ばれた人々は、祭日の 3 日前祭庁に入り合宿して斎戒する。これを「三日精誠」という。祭儀を行う前後に不浄なこと、村人の説明によれば、死体を見たり、馬、犬の肉を食べたりすることなどがないように、祭官は勿論、村民のすべてが心をこめて精誠をしなげればならない。以前は祭儀を行う際の礼服や儒巾を各自準備したが、現在は一括して用意している。

次は供物についてみる。供物は、祭日の前日に用意して置き、子時の少し前に供え、子時に祭儀を執り行う。供物は、稲・粱・黍・稷の四種類のご飯、黒い雄の豚（犠牲）、幣帛、果物、祭酒、海魚、野菜類などである。ご飯は、稲・粱・黍・稷の四種類のご飯を一器ずつ供えてきたが、生産されないものがあったために、粱の代わりに稲飯二器、黍・稷の代わりに粟飯二器を供えている。現在は、稲飯と粟飯一器ずつ供えている。犠牲の豚は、西神・土神・酺神の三つの祭壇に一頭ずつ供えてきたが、現在は西神壇では祭儀を行わない

ので、土神壇と酺神壇のみ供えている。犠牲は内蔵を処理した、生の豚を供えることをいう。幣帛は明紬、白紙を上げる。果物は栗・棗・榧子・橘・梨、祭酒は甘酒を用いる。海魚は脯の代わりに焼き石持一尾を供えており、野菜は青芹を用いる。

祭儀は供物を供えた後、子時になると、執礼の笏記の奏上によって開始する。手順は、奠幣礼、初献礼、読礼、亜献礼、終献礼、撤辺豆、望燎位の順で行っており、これは郷校の釈奠祭と大同である。一般に他村でもこのような手順によって行われている。しかし、納邑里では三神位が祀られているために、奠幣礼を行ってから、各献官が土神、酺神、西神の順で祭儀を行う。その後、献官 3 人が原位置に戻って四拝する。撤辺豆は飲礼の後、祭官が祭器を下げることであり、望燎位は祝文を焼く場をいう。

祭儀が終わると、祭官と村の人々は犠牲の豚をはじめ、祭物を飲福（直会）しながら村の様々なことについて話し合う。かつては女性は祭儀に参加することができなかったが、約 10 年前から女性も参加して手伝っている。しかし、女性が祭官になることはできない。このような飲福ということを通じて、村落共同体に対する意識を再構築する。さらに村の人々は村の成員としてのアイデンティティーを再確認するといえよう。

5. 考察

以上のように、納邑里の村落共同体信仰の酺祭について考察し記述してみた。さらに現在、存続している祭儀の歴史的背景を理解するために、韓国における村落共同体信仰の変遷の過程を探ってみた。

既述したように村落共同体信仰とは、生活基盤をともにする村の人々がその生活を脅かす災害から免れて、何の不安もなく幸福な生活を営むために、一体感を形成し村の共同神に祈願を行う村落の年中行事をいう。これは、村という社会共同体に基づき行われる集団祭儀である。その祭儀が儒教式であれ、巫式であれ、どのような形式にかかわらず、村の人々にとっては毎年欠くことのできない、集団祭儀が執り行われることこそが大事な行為のように考えているのであろう。つまり、村落共同体信仰はその土地の人々が生活の中から案出した生活習慣ともいえるものである。それゆえに祭儀の周期性や連続性というものは、祭儀が行われる村の社会構造のなかで考察すべきであろう。

このようなことを踏まえ、生活や社会という場で行われている納邑里の村落共同体信仰から、若干の点を取り上げて試みたい。

第一は、祭儀の類型の問題である。現在納邑里で行われる村落共同体の祭儀の酺祭は、巫式の祭儀から儒教式の祭儀への変遷したのではないか、ということである。

郷土史（金行玉編 1984：34）によれば、納邑里で村の人々が村の中心に集まり、約 100 戸に達する自然村落を形成したのは、李朝時代の 1600 年代の後半頃である。納邑里では 1684 年、何十回の病苦や凶年が生じ、錦山という畑に祭壇を設けて春と秋に山川神祭という祭儀を行ってきた。

ところが、李朝時代の儒教政策は、巫俗や仏教を抑圧して巫俗祭儀の存在を否定してきた。それゆえ 1700 年代に入り、納邑里で行われていた山川神祭が迷信とされ禁止されてきたが、飢餓や怪疾の発生が絶えず、村の人々の切なる願いによって祭儀を行うことが許容され復活している。

しかし、その時代の儒教思想が日常生活の規範と礼節として位置づけられていた村では、儒教的要素が巫俗祭儀に加えられ、男性が主管する儒教式の祭祀へ変化し、村落共同体の祭儀が行われてきたのではないか、と思われる。なぜならば、この李朝時代には今までの固有の巫俗的集団祭儀が禁じられ、儒教思想の普及とともに男性の主管する儒教式祭祀が普遍的信仰に変わり、新たな儒教式の村落共同体信仰が行なわれていたからである。

第二は、祭儀の空間的・時間的構造の問題である。村落共同体信仰は、歴史的、政治的、社会的、文化的な諸要素を考えたうえで、そのあり方や位置づけが可能であろう。というのは、村落共同体信仰は村落の構造や機能を示すものであるために、村落共同体の祭儀には社会構造の変化が反映されるからである。さらに村落共同体信仰の盛衰の状況によって、村落の社会構造の変化などの様相を把握することができよう。

それゆえ、村落共同体信仰は巫俗祭儀から巫・儒教式祭儀へ変化したという信仰の類型的変化の問題のみに注目し把握するのではなく、その祭儀と関わる人々が生きている社会・文化のなかで、いわゆる生活の場で考察すべきであろう。

納村里の村の人々は儒教思想を何よりも重要とし、その秩序に基づいて村落共同体の生活を営んでいる。村の人々は伝統的儒林村であることを非常に誇りを持っており、そのような儒教的観念は、現在村落共同体の精神の基盤となっている。現在、孝道示範村と指定されていることから、如何に孝と礼の思想を実践する村であるのかが分かる。こうした村落で、儒教式の祭儀が従来の通りその伝統性を保存や維持し行われていることに、祭儀の重要性や価値があるといえよう。

1970 年代、韓国社会に広がったセマウル運動によって、韓国全土で祭儀が禁止され、祭壇や祭堂が破壊された。しかし、村人の説明によれば、済州島納邑里ではこうした政府の政策や地方行政管理者による厳しい取り締まりがあったにもかかわらず、祭儀を中断せず保存し維持してきたという。

儒教式の祭儀は、限られた祭官によって静粛に行われる。祭官の選出の際には、儒教思

想に基づいた位階秩序が見られる。つまり、村落共同体の儒教式祭儀には、その土地の位階秩序が反映されており、それこそが村の生活の秩序である。しかし、納邑里ではこうした祭儀が行われるまでに、村のすべての人々は禁止されている事項を守り、また祭儀を行った後、飲福という行為を通して祭儀に参加している。このようなことから見ると、男女の区別なく村のすべての人々によって行われる共同体の集団祭儀であるといえる。

このような側面を考慮すると、村落共同体信仰は祭儀が行われる生活や社会という場の空間的構造、つまり地域的状況や条件によって、また社会的、文化的、歴史的変動という共時的・通時的構造によって、その現状が明らかに見えてくるのではないか、と思われる。

第三は、祭儀を通してみた中心と周辺の問題である。加地伸行（1994）が述べたように儒教は日本、朝鮮半島、中国、すなわち東アジア地域を結んでいる大文化である。特に韓国の場合、李朝時代以降、儒教は一つの宗教というより、生活規範や慣習のようなものであり、儒教的観念に基づいて社会的秩序や倫理、また人々を支える精神が成り立ってきたのである。

韓国の行政区域でいえば、納邑里は行政の末端組織である。済州島は韓国の周辺社会や文化の一つをなしており、さらに済州島を中心に考えれば、納邑里は済州島の周辺社会や文化を形成する一地域である。

1970年代以降、韓国は高度経済成長によって、産業化・都市化が進み、その影響は農村や漁村まで至り村落共同体の解体の危機を迎えていたのである。また社会変化に伴って、村落共同体信仰が消滅したり、中断したりした傾向が現れている（姜京希 1997）。

しかし、納邑里では外部社会の影響による変動にもかかわらず、儒教思想に基づいた村落共同体の生活を現在まで維持し営んでいる。そのような要素は村落共同体信仰を通してよく現れている。納邑里で行われている村落共同体の酺祭は、済州島無形文化財に指定されており、伝統文化を守ってゆく村として他地域の見本となっている。納邑里の祭儀は、現代社会における村落共同体信仰として新たに評価され認められているといえる。

こうした祭儀を通して成している村落共同体の一体感は、社会変化による村の過疎化や高齢化の現象によって、廃止の危機に直面していた納邑小学校を存続させるために、村の人々の協力のもとに多世帯住宅を建てて無償で小学生のいる家族に提供している。言い換えれば、外部の様々な要素で村の伝統的な生活が解体され、崩壊する危機に置かれた際、村落は酺祭という村の行事を通して、新たな生活の活力源となる求心的力を求めており、村を再構成し統合している。

納邑里のような周辺社会に根を下ろしている祭儀の文化が、済州島の他地域または韓国全体の中心社会に及ぶ影響を考えねばならないのであろう。韓国では、1980年代の後半か

ら伝統文化を見直すという動きによって、迷信とされて禁じられた様々な祭儀についての再検討と再評価が行なわれているからである。例えば、済州島では 1990 年代に入り、各村落の酺祭壇を再整備し、行政的次元で酺祭の祭儀費用が支援されているような傾向が現れている（姜京希 1997：108)。

こうした状況から考えれば、中央と周辺という枠組は地理的、環境的境界を乗り越えるものであり、周辺社会・文化が中心社会・文化を作り出すような現状をも考えなければならないのであろう。

どのような文化でも、それが作られ伝承されていくには、その役割や機能があることに注目し、客観的な価値や機能を把握する必要がある。常に社会的、文化的変動が、どの時代にも存在するのは事実である。こうした変動のなかで、現代社会において我々の生活の場と密着している祭儀は、社会表層の一つとしてその堅実なあり方や位置づけを考慮すべきである。

6. おわりに

済州島納邑里の酺祭の事例を中心に、村落共同体信仰の変化と持続について考察してみた。今回の「環東中国海における二つの周辺文化に関する研究—沖縄と済州の‘間地方’人類学の試み」という題目のプロジェクトによって行われた済州島納邑里における現地調査では、韓国、日本、中国の儒教文化圏という大きな枠組のなかで、周辺社会や文化を考えて見たかった。そこで納邑里の村落共同体信仰を一つの手がかりとして、環東中国海に囲まれている周辺社会や文化を理解し位置づけを試みた。

済州島納邑里の社会的、歴史的背景を探りながら、その村落共同体の生活の場で行われる祭儀を調査したが、限られた期間の現地調査であったために、村落における民間信仰の様々な様相をすべて把握することはできなかった。しかし、納邑里の人々のお話から、村落共同体信仰は、儒教式の祭儀、つまり酺祭が如何に重要な行事であり、村の人々の精神生活に影響を及ぼしているのかが明らかになった。

納邑里の村落共同体の祭儀を通して、現代社会における祭儀のあり方や位置づけについて次のようなことがいえるだろう。村落の社会構造が変わったり、組織が弱くなったりした際、祭儀は弱化されるか、中止または廃止される。現代社会において祭儀が急速に消滅しているのには、こうした社会変化が反映されているといえる。一方、社会変化によって統合性が弱くなることに対して、村落共同体信仰は新たな勇気や活力源を求め、統合の力を与える機能があることをも見逃さないであろう。

今回の調査の成果を踏まえ、儒教以外の仏教や道教、さらにキリスト教のような西欧宗教による村落共同体信仰の現状をはじめ、民間信仰の諸様相や側面を考察し、また環東中国海周辺の多くの他地域との比較研究することを、今後の課題にしたい。

謝辞

今回の調査は、2000年度文部省科学研究費補助金日韓共同研究（研究代表者：津波高志）の一環として行われたもので、私は研究協力者として参加させて頂いた。

済州島納邑里の調査にあたって、納邑里金運玉里長をはじめ、金彰根老人会会長、文熙相開発委員長、並びに多くの方々のご協力を頂き、お礼を申し上げたい。特に金仁昌前老人会会長からは、村の案内や説明、また様々なお話を聞かせて頂いた。この場をかりて皆様に深く感謝を申し上げたい。

注

注1.　酺祭祝

維歳次云云　幼学姓名　敢昭告干

酺神之霊　伏惟酺神　除灾降福　保我人民　報賽無斁

土神之霊　保艮社神　恵我恩徳　願賜物豊　長養寿域

西神之霊　降臨西神　善養児輩　以賜紅疫　全然無頓

謹以犠幣　酺斎粢盛　庶品式陳　祇薦干神　尚饗

（『済州島部落誌』（II）、済州大学耽羅文化研究所　1990：81）

参考文献

（著者名は、アルファベット順になっている。）

済州大学博物館

1998　『北済州郡の文化遺跡（II）—民俗—』（韓国語），北済州郡.

済州大学耽羅文化研究所

1990　「北済州郡涯月邑納邑里」『済州島部落誌』（II）（韓国語），済州：済州大学耽羅文化研究所，pp. 18 - 103.

涯月邑

1997　「納邑里」『邑誌』(韓国語)，涯月邑誌編纂推進委員会，pp. 277 - 303.

韓国文化広報部文化財管理局

1992　竹田旦・任東権訳『韓国の民俗大系―韓国民俗総合調査報告書』第5巻，済州道篇，東京：国書刊行会.

張寿根

1975　『韓国の民間信仰』論考篇，東京：金花舎.

加地伸行

1994　『沈黙の宗教―儒教』，東京：筑摩書房.

姜京希

1997　「済州島漁村の近代化と宗教変化：加波里の事例を中心に」『済州島研究』第14集（韓国語），済州学会，pp. 81 - 156.

金行玉編著

1984　増補『納邑郷史―済州道沿革』(韓国語)，北済州郡涯月邑納邑里，ソウル：平凡社.

高麗大学校民族文化研究所

1982　『韓国民俗大観』第3巻　＜民間信仰・宗教＞（韓国語），ソウル：高大民族文化研究所出版部.

李杜鉉・張寿根・李光奎共著

1991　『韓国民俗学概説』新橋版（韓国語），ソウル：一潮閣.

村山智順

1937　『部落祭』朝鮮総督府.

納邑里

1990a　『納邑消息』創刊号（韓国語），納邑里.

1990b　『納邑消息』第2号（韓国語），納邑里.

1991　『納邑消息』第3号（韓国語），納邑里.

1993　『納邑消息』第4号（韓国語），納邑里.

1995　『納邑消息』第5号（韓国語），納邑里.

1997　『納邑消息』第6号（韓国語），納邑里.

朴桂弘

1982　『韓国の村祭り』東京：国書刊行会.

環東中国海における二つの周辺文化に関する研究
－沖縄と済州の｀間地方´人類学の試み－

平成10～12年度科学研究費補助金
基盤研究（A）（2）研究成果報告書
課題番号　10044011

平成13年3月31日　発行

研究代表者　津波高志
（琉球大学法文学部教授）
〒903-0213　沖縄県中頭郡西原町千原1番地
琉球大学法文学部
TEL　098（895）2221（代）

印　刷　（資）中央製版印刷
〒901-2201　沖縄県宜野湾市新城1丁目7－5

環東中国海における
二つの周辺文化に関する研究

－沖縄と済州の｀間地方´人類学の試み－

平成 10～12 年度科学研究費補助金
基盤研究（A）（2）研究成果報告書
課題番号　10044011

平成 13 年 3 月

研究代表者　　津　波　　高　志
（琉球大学法文学部教授）